

谷口財団数学部門の役目を終えて

村上 信吾

過去二十年余り関わってきた谷口財団数学部門の仕事を終えて、思い出すことなどを綴り、総括したのがこの文である。

一。不思議な縁で

それは一九七六年初夏のことだった。日頃すっかりご無沙汰していた秋月康夫先生から突然一通の封書が届いた。開けてみれば、流麗な筆跡で次の主旨のことが書かれていた。谷口財団数学部門の国際シンポジウムの翌年度分の世話をしてもらいたい。自分の年令からしてこの仕事からの引退を考えているので、その前にあの第一回赤倉セミナーを組織し今はアメリカにいる松島・野水の二人を招き、余り多くない人数で多様体の幾何をテーマに今度は国際的な会合を企画してくれまいかとのこと。私はこの重責が果たせるかどうかしばらくためらったが、秋月先生からのご依頼であり、一九五六年の赤倉セミナー「微分幾何学の基礎とその応用」にほぼ同年配の数学者十人と共に参加し、そこから大きな恩恵を受けた者として、これは謹んで引き受けるべきであると決めた。ただ開催年は一年遅らせて翌々年をお願いすることにして、秋月先生にこの旨の返事を出し、同時に松島与三、野水克己の両先輩にもこのことを知らせて意見を求めた。それから半年間、秋月先生から「余り多くない人数で」というのは谷口氏の意向であると教えられ、しかし私の提案した参加者約四十人の規模ならばよかろうと先生は了解されたので、この線で招待者の人選を終えた。年末には在外日本人招待者に手紙を送り、続けて年が明けて外国人十数名に英文招待状を送ろうとしていた矢先、数学教室の私の目の前の電話が鳴り、秋月先生から予期せぬ指令が入ったのである。

電話を通して聞く先生の声は弱々しく投げやりとすら言える調子だった。「君の計画は良いのでその通りにして欲しいのだが、人数が四十人では谷口が困るという。昨日このことで谷口と電話で喧嘩したが、どうしても、うん、と言わん。君は大阪にいるから、この後は直接谷口に会って話をして欲しい」。こうして私は谷口豊三郎氏を訪ねることになったが、これがその後二十年余りにわたる谷口財団数学部門との不思議な縁の始まりである。

二。谷口豊三郎氏との出会い

谷口豊三郎氏は一九〇一年生まれ、東大卒業後ご父君の設立された大阪合同紡績に入

社、二年後に同社取締役就任、同社が東洋紡績と合併した後は、東洋紡績の取締役、社長、会長を歴任、七七年当時は相談役。関西経済界の重鎮で、私には雲の上の人であった。秋月先生、それに孤高の数学者岡潔と三高で同窓の誼で、数学者への財政的援助はご自身が創設の谷口財団を通して、また個人的にも戦時中から始められていた。五六年からは谷口財団の事業活動を数学研究への援助に限られ、数学振興会が設けられて、以後毎年数学シンポジウムがこの会の援助金を受けて開催されていた。第一回赤倉シンポジウムはその発端である。七四年からは谷口数学国際シンポジウムに変わり、以来毎年「有限群論」、「数論」、「代数幾何学」をテーマにかなり大きな規模のものが開催されてきた。秋月先生が私に依頼されたシンポジウムはこの行事の七八年度版であると私は思いこんでいたのである。

さて、秋月先生の命に従い、七七年二月のある日、私は谷口豊三郎氏を東洋紡績の社屋に訪ねた。谷口氏の秘書奥田繁雄氏に案内され、小さな応接間に通されて待つことしばし、姿を見せられた谷口氏は古稀を越えた人物とはとても思えぬ風貌、いかにも実業界の紳士らしい物腰で私の挨拶を受けられ、テーブルを挟んで私を面接するように座られるや、若々しい声で語り始められた。

自らが新たに谷口財団を創設して国際シンポジウムを援助しようと志すのは、一九七〇年代の初め「日米繊維競争」に交渉団長として訪米した経験から、国際的な相互理解の重要性と困難を痛感したからである。今後、日本が生き延び発展するには、諸外国の人々と日常的に、機会あるごとに、人間的な交流を重ね、互いに理解を深める努力が何より必要である。こう信じて、将来を担う内外の学者の間の交流の場を作り、自分の考えをほんの僅かでも実現したいと思う。どうか協力して欲しい。こう言って、谷口氏は親子ほど年の違う私を相手に何の銜いも無く、切々と心情を吐露された。この間に「若い時に友情を育てて欲しい。老年になって名刺を出して話しても話は通じない」、また「日本の将来のために九牛の一毛として財団を作った」という文言があったのを覚えている。さらには「功なり名を遂げた学者は他の金で呼んでほしい。若い将来のある人ならば大学院生でもよい」ともあった。最後に「このような主旨だから、シンポジウムには次代を担う優秀な人を集め、十数名の少人数で数日間起居を共にしてもらいたい。これらの条件を尊重しても例えば必要経費は惜しまぬし、来日外国人にこの機会に別の公開講演会で話を頼んでもよい」と述べられた。話し終えられた谷口氏は「ではよろしく頼む」と一言あって、さっと席を立って行かれた。この間二十分位であったろうか、私は谷口氏の誠心誠意語られたお

話に深く感動して、しばらくの間それを胸中に反芻していた。計画していたシンポジウムについて何の説明も求められなかったことに気付いたのはしばらくしてからである。

三。第五回谷口数学シンポジウム

後で知ったことだが、谷口氏は昭和四年、一九二九年に亡父房蔵氏のご遺志に基づき、関西での基礎科学技術の研究を援助する目的で谷口工業奨励会を創設された。これを一九七六年に巨額の私財を新たに投じて改組し、自らの理念に基づく新しいスタイルの国際学術シンポジウムの開催を目的とした「谷口工業奨励会四十五周年記念財団」、通称「谷口財団」を新たに設立されていたのである。谷口氏のご指示により「谷口国際数学シンポジウム」は七四年の「有限群論」をもって第一回としているが、新財団が援助する七七年以降は当然谷口氏の財団創設の理念に沿うものに変わらなければならなかった訳である。

こうして私が企画していたシンポジウムは人数だけでなく、参加者の年令からしても谷口氏の意図を外れるもので、返上を考えざるを得ない状況になった。しかし、この時思いがけぬ助け人が現れた。当時阪大理学部助教授で、私のシンポジウムの計画作成にも相談に乗ってくれていた落合卓四郎君である。私の話を聞いて間もなく、それならば「幾何学的関数論」をテーマに国際シンポジウムを谷口氏の趣旨に従って開催したい、と私に申し出られた。私は彼の数学的力量、滞米経験で得た豊かな国際感覚から即座にこの話に乗らねた。秋月先生の了承を得るべく落合君を伴い七七年三月二十日神奈川県大磯の秋月邸を訪ねた。秋月先生にはこの新提案を了解してもらったが、この時またその後の運命を決めることが起きた。私は落合君に頼んだ以上、このシンポジウムは専門外のテーマだし、これには無関係でいる積もりでいた。ところが、帰り際に玄関先で秋月先生から「シンポジウムの運営上の世話はやはり村上君がせよ」との鶴の一声、先生にしてみれば初対面で若い落合君だけに任せかねられたのだろうが、こうして私の谷口シンポジウムとの長年の縁が始まったのである。

こんな訳で私は第五回谷口シンポジウム（正式には谷口国際数学シンポジウム）の組織に関係することになった。招待者の人選やスケジュールは落合君に一任したが、これについて落合君はパークレイの小林昭七君と相談していたようだ。また落合君はノートル・ダム大学以来の友人で阪大助教授の八木克己君に協力を求め、組織委員会は落合・八木・村上の三人で構成した。七七年中に内外の招待候補者を決め内諾を得ていたが、七八年二月に谷口財団から援助金交付正式決定の知らせを受けて、同年三月六日付けで参加者に正

式招待状を村上の名前で発送した。

このシンポジウムは七八年九月一日から六日間、滋賀県堅田にある東洋紡績研究所内の研究会合用の施設「求是荘」で開催された。谷口氏の意向に合わせて参加者総数は十六名、全員の平均年齢が四十才弱という若い活気にあふれた数学者が集まり、一同は近くのホテル・レーク・ピワに合宿して日夜数学を議論し、余暇には雑談にも大いに興じていた。秋月先生は老駟を押して大磯から来場され、どの講演にも顔を出されて、若者たちの活動を終始にこやかに眺めておられた。また、中日の九月三日には京都に遊び、午前には谷口氏お薦めの京都博物館常設館を見学、午後は鉄道で亀岡に至り保津川下り、夕方には京都四条のフランス料理の萬養軒で谷口氏の招待レセプションを受け、舞妓の京舞も見せてもらった。数学者の意表をつく豪華な遊びの一日であった。

なお、この堅田でのシンポジウムに続いて、九月七日午後から十日午前まで京大数理解析研究所で公開講演会として共同研究集会在、中野茂男教授の世話で開催されて外国人参加者は一名を除いてここで講演し、約百人の集会参加者と交流した。また、シンポジウムの成果として通常は論文集形式の報告集が発刊されるが、谷口氏の報告集は重視しなくてよいというご意見に甘えて、シンポジウムの席で提出された問題を集めた小冊子「オープン・プロブレムズ・・・」の発行に止めた。

年が明けて二月、この谷口シンポジウムの事業・会計報告を持参し、谷口氏に直接お礼を言うべく東洋紡績を訪ねた。挨拶の後、谷口氏は報告書を手にはデスクに戻られ、黙ってこれに目を通し始められた。その間何分過ぎたであろうか、私は審判を待つ思いで身を縮めて待った。やがて柔和な顔を見せられた谷口氏は秘書の奥田氏に書類を渡され、何事もなかったように私の前のソファに席を移され、私の労をねぎらわれた。この時、新しいシンポジウムの形式は谷口氏に意に叶ったと感じ、私はたいへん嬉しかった。この後、谷口氏は二度と私に厳しい顔を見せられたことが無く、私は何時しか谷口氏を「谷口さん」と言うようになっていた。

この第五回谷口シンポジウムの運営形式はその後ずっと谷口シンポジウム開催方式のモデルとなった。これには私の書いたマニュアルが役立ったので、このことを私は内心ひそかに喜びかつ誇りとしている。なお、前年に伊藤清氏が担当された第四回谷口シンポジウムはすでに招待者など案が決まった段階で、谷口氏の意向が知らされ、伊藤氏は苦慮されたと聞く。この結果、人数と合宿形式は尊重されたが、参加者の年齢は必ずしも若くはなかった。

四。それから二十年

歳月は過ぎるのは早いもので、七八年の思い出深い谷口シンポジウムがついこの間のことと思えるのに、あれから二十年が過ぎた。谷口財団は今世紀末に解散することが決まり、それを控えて谷口財団数学部門では、谷口シンポジウムを九七年度で終えて、九八年度には部門閉鎖の記念行事として、奈良で谷口国際数学講演会を開催した。当初、数学部門の責任者は秋月先生だったが、八一年からは数学部門に限り年に二つのシンポジウムを組織することが谷口さんのご好意で許されて、部門第一部、第二部としてそれぞれ伊藤清氏と私が担当してシンポジウムを実施してくれる人を選び、二人で相談の上その世話を頼むことになった。八四年に秋月先生が亡くなられてからは、この二人が数学部門第一部、第二部の責任者として財団に対する責めを負っている。

この期間に行われた数多くの谷口シンポジウムにはそれぞれに思い出が尽きない。いずれも立派な実施責任者が力を尽くして組織運営されたので、谷口シンポジウムは世界的に有名になり、米国ではこれに招かれたことを名誉として個人の履歴に書いているほどである。七四年の第一回から数えて計四十一回の谷口シンポジウムが開催されたが、これらのシンポジウムの組織運営に関わられた多くの数学者の多大の苦労は私の経験からも十分推察申し上げる。これらの方々に、ここに心から感謝の意を表明したい。

それにしてもこの二十年間の数学の、そして数学者の気風の変化には目を見張るしかない。例えば抽象代数学のように二十世紀になって花咲いた数学は、他の科学から独立して発展してきたが、世紀の半ばを過ぎる頃からその成果を数理論物理学者の利用するところとなり、また物理学者は逆に数学者に問題を提供し始めた。この新しい数学と物理の交流の中で、新規の研究がこの二十年來大きく展開したと言えるだろう。もちろん純粹数学の研究も深化し、そこでは抽象数学の成果をもって古典数学を再び取り上げ、それが多くの新しい結果を生んでいる。四十一回の谷口シンポジウムのテーマはこれらの事実を例証しているように思うが、どんなものだろう。一方、数学者の気風では、谷口シンポジウムにやってくる外国の若者たちはみんな生き生きしているのに、概して内向的な日本の数学者は若い人がますます社交性を失なって、外国人と余り接触したくないように見受けられるのである。谷口シンポジウムという学問的交流に加えて、人間的な接触が積極的に期待されている場でこの現象は決して好ましいことではなかった。二十年前の第五回シンポジウムの頃はまだ外国行きは夢であったし、若い人は積極的に話したがった。近頃の日本人参加者の大半はずでに外国での学会出席などの経験があるので、今更改まって国際交流でもある

まいと思っっているのだろうか。そうとすれば時代の変化の故と言うしかないし、国際化の潮流が滔々と渦巻く中で谷口シンポジウムはまさに時を得て終焉を迎えたと言えるだろう。そして、谷口シンポジウムは二十世紀第四半世紀に日本で行われた特異な国際シンポジウムとして数学史に名を留めることを期待したい。

この二十年間、私の谷口財団数学部門での役目は第二部のシンポジウムのための適当なテーマと組織者を選ぶことだった。時には自薦で谷口シンポジウムをやらせてほしいという申し出があったし、また第一部のテーマを伊藤氏の求めに応じて推薦したことがあった。外国人には私はシンポジウムのコーディネーターの立場にあると称していたが、この仕事は実はたいへんな重責であった。まず、谷口さんは私に何度か「このお金は私が先生を信用して差し上げているので、学会や協会に差し上げているのではない」と釘を刺された。事実、財団のある部門では責任者の逝去により部門が解散になっている。私は谷口さんのこのお考えを明治人の気骨がもたらすものと尊重して、私が内心である時に目論んだ企画委員会をつくることは諦めた。一人で決めるとすれば非公式に周囲に意見を求めることはあっても、最終的には自らの判断に依らなければならぬ。テーマを選ぶ上ではその分野が如何に世界的に活発であっても、日本でこれに拮抗できる数学者がある程度揃っていないければ、谷口シンポジウムという少人数の膝を突き合わす研究会には相応しくない。あれこれと考えていつも悩んでいたことを告白しよう。私が数学上で目の届かなかったために、当然お願いすべき人にシンポジウムの組織の依頼を逸したこともあろうと思う。これは奈良の講演会の開会式の挨拶で来会者に謝したことである。

ここで思い出に残るシンポジウムの一つ、九六年春に開催の第三十九回「解析的数論」を書き留めておく。その二年前のある日、突然未知の数学者本橋洋一君から人を介して、谷口シンポジウムをやらせてほしいと言う申し出を受けた。本橋君の名前は知っていたが、面識は無いし、解析的数論は私には風馬牛、ともかく一度会って谷口シンポジウムの説明をし、企画の内容を聞きたいと答えた。この年の秋京都で本橋君に会った結果、本橋君は国際的に大活躍をしている数論学者で、元氣な弟子たちを育てているし、またシンポジウムの計画もしっかりしていることを知り、私は大いに心を動かされた。雑談に移って本橋君は京大出身、秋月先生の最後の学生で、先生の世話で現在勤めている日大に就職したという。私はここに奇縁を感じ、その場で提案を受け入れることに決めた。本橋君はこの谷口シンポジウムでもその後の京大数理研での講演会でも、いろいろ新機軸を凝らして会議を運営し、十二分に私の期待に応えてくれた。なお、このシンポジウムに招かれた

ピーター・サルナクはシンポジムの初日に私の名札を見て「松島の友人か」と訊ね、昔の松島さんとの共同研究の延長上にある最近の結果を詳しく話してくれた。これは私にとってこのシンポジウムがもたらした思いがけぬ数学上の収穫であった。

五。谷口哲学を思う

谷口豊三郎さんは一九九四年十月二十六日にこの世を去られた。谷口財団は創設時から基本財産を食い潰して、それが終わった時に解散することに決められていて、谷口さんのお積もりではそのご在世中にそうなるはずだった。しかし、あのバブル経済の余波で財団はついに二十世紀の終わりまで生きのび、各部門の行事が九八年度まで続いた。谷口さん亡き後、ご長子の谷口雄一郎さんが財団常務理事の役職を後を継がれたが、惜しいことに翌年に逝去された。それからは新常務理事が谷口さんの役割を果たし、シンポジウムの度に催されるレセプションでホスト役を務めるが、この場での言動はこの人物が谷口さんの財団創設の意図を理解しているとは到底思えない。高邁な谷口さんの哲学から生まれた谷口財団は、谷口さん父子が逝去されて、すっかり変質して終局を迎えようとしている。

これからの時代にあの谷口さんの哲学、その抱かれた高い理想、日本の未来への思いはどうなるだろう。これを考える前に谷口哲学の起源を探ろう。すでに述べたように、谷口氏と数学の縁は旧制第三高等学校、三高、で後に数学者となる秋月康夫、岡潔の二人と同窓であったことによる。良き時代の旧制高校三年間に生徒間に生まれる友情と連帯感は、そこでの少人数教育の故であろう、終生続いている。谷口さんは繰り返し、谷口シンポジウムを考案し、多くの偉い学者に喜ばれるようになったのは、秋月のお陰であると仰っていた。また、岡潔の奇行を楽しげに話されたことも再三であった。

谷口さんの哲学はこの三高時代に培われたものと私は思う。旧制高校に入れば大学入学は保証されていたので、生徒たちは青春を謳歌して、あえて難解な哲学書を読み耽り、友人と形而上学的な議論を弄んでいた。その中で人生を考え、将来への夢を描く。私もあの戦争末期に三高に学んで、厳しい時局の中でなお自由を唱え、反戦を口にする先輩がいて驚いたが、そのうちに私自身がいつしか自由を憧れるようになっていた。兎も角谷口さんはこのような三高生活の中で、自らの人生哲学を確立し、後年それが谷口シンポジウムを生んだと私は確信している。なおまた、谷口シンポジウムを特徴付ける少人数で起居をともし、お互いの間に友情を育くもうという発想は旧制高校の寮生活からヒントを得られたに違いない。人は誰でも数日間起居を共にすれば、否応なしにお互いをよく知ることに

なるが、谷口さんは寮生活の経験からこのことをよくご承知で、寮方式を谷口シンポジウムに適用して国際間の深い相互理解を図ろうと考えられたのであろうと思う。

現代のこの忙しい日本の社会で谷口さんの哲学はどれほど理解されるだろう。谷口シンポジウムの恩恵を受けた内外の数学者の間に、谷口さんの巨額の金銭的援助に大きな感謝の声があるのは当然のこととして、谷口シンポジウムを生んだ谷口さんの高邁な精神にどれほど思いを巡らしているだろう。谷口シンポジウムの目的は学術交流と並んで、内外の参加者の間に友情を育てることである。谷口シンポジウムに來会の外国人数学者はレセプションの席で谷口さんのお人柄にじかに接し、その語られる理想を聞いていずれも感動していた。日本数学会は九四年に谷口さんの数学界への貢献に対して第一回関孝和賞を贈った。たいへん結構なことである。しかし、その際に数学会の大方の会員にこの谷口さんの哲学が語られ、内外の若者の間の友情を願うロマンが伝えられたらどうか。谷口シンポジウムは単に数学者の活動を援助しようという篤志家の産物ではなく、谷口さんの哲学を背景にした極めて精神的な事業であった。この谷口さんの功に報いるには世俗的な賞もさることながら、今後も国際シンポジウムなどあらゆる機会を通して国際間に新しい友情を生み、日本と人類の将来のための努力を続けることが最上の途であろう。

終わりに私的な思いを書き加える。私は不思議な縁で、谷口さんのロマンの実現のために有難い下働きをする立場になり、二十年を過ごした。この間毎年谷口さんにはシンポジウムのレセプションでお目にかかり、また年明けにはシンポジウムの記念アルバムを持参して谷口さんのオフィスを訪ね、その年の御礼を申し上げた。その度に谷口さんにはこやかに私を迎えて下さり、私はそのお人柄にますます魅せられて、不肖の身を励まされたのである。谷口さんはわが人生の師であり、谷口さんに巡り合えたことはわが人生にとって掛け替えの無い幸せであった。

去る三月十八日には雨の中、財団法人職員の中村久子さんに案内を乞うて、井川満君と共に谷口さんのお墓に詣でた。墓前に額ずき、数学部門の無事終了を報告し、多年のご愛顧へのお礼を述べた時、谷口さんの温顔が目前に浮かび、万感が胸に迫って込みあげてくる慟哭の涙を抑え切れなかった。ご冥福を心から祈念した次第である。(終)

(一九九九年四月記)